エッセイ

変わっては来ている

澤　順子（さわ　じゅんこ／東京都在住）

大学時代、女性問題を研究するサークルに所属していた。もう数十年も前のこと。そのころ私のいた大学は、ミッション系の共学で自ら「自由の学府」と唄っていた。

そのサークルでメンバーが校内に訴えていたのは、今ではごくごく当たり前のことだった。しかし、それを伝えるのは至難の業だったような気がする。女性差別という言葉を使っただけで「過激な、先鋭的な女の子（女性ではなくて女の子‼）」とまで言われたこともある。

何しろ、女性が受ける性暴力ですら、その問題を伝えても薄ら笑いする学生も結構いたし、一見進歩的なスタンスを取る「活動家」だって、活動の裏では、お母さんにご飯を作ってもらうことが当たり前だったりして、そのことにウンザリしていた友人も数多くいた。学生運動が終焉を迎えていたころの話だけど、彼らの主張が世間の多くには受け入れなかったことも仕方ないと今でも思う。

私は卒業後、保育士資格を取るために一年間一般企業に勤めたが、「お給料のため、生活のため」と割り切ってお茶くみ、走り使い、飲み会での笑顔、と「若い女の子」に期待される仕事をこなした。社内では「気が付くいい子」のふりをして、辞めるときは引き留められたが、こんな仕事何年も続けられないという本音を隠して、にっこりと退社した。

その後、公務員試験を経て保育園の職員になったが、飲み会に同じ役所の男性がいても誰一人「お酌」しない。女性が男性にサービスするなんていう文化が存在しない世界がそこにはあった。仕事内容ももちろんだが、その体質が心地よくて、遂に定年まで同じ自治体で保育士の仕事をしてしまった。

一方、2000年代に大手の広告会社に就職した姪は、わずか一年足らずで適応障害になって退社した。後で直接聞いた話では、当時はセクハラ、パワハラは当たり前。若い女性は飲み会要員？なる言葉で接待先に呼ばれることも多く、それも仕事と信じて頑張るうちに適応障害になったとのこと。姪は退社後すっかり元気になって、今では二児の母だ。辞めてよかった。

そんなことを思い起こしていくと、今でもいろんな差別はなくなってはいないが、NOとする声をあげるハードルは確実に低くなってきたと感じる。

さて、最近の話。「自分の性に違和感がある」と親に訴えてカミングアウトをした中学生の男の孫は、その後普通に学校生活を送っている。スカートをはいて通学し、体育の着替えの場所は「多目的室」を使い、ひとりで着替える。学校の先生も対応に慣れていて、最初に親が伝えてからの動きも、とてもスムーズだった。いわゆる「女の子らしさ」は彼（彼女？）は持ち合わせていないようで、しぐさも興味もフラットで、なかなか面白い風を家族に吹き込んでくれている。一昔前なら大騒ぎだったかもしれないから、いい時代に生まれたのかもしれない。

小さな声から始まった大きな波は誰にも止められない、と実感する今日この頃。